

George Gissing, *The Odd Women* 研究

— 父権制とフェミニズムの衝突 —

八 幡 雅 彦

MASAHIKO YAHATA

A Study of George Gissing, *The Odd Women*

— A Conflict between Patriarchy and Feminism —

In the late nineteenth century, Britain saw the rise of feminism and its conflict with long-established patriarchy at the same time.

In *The Odd Women*(1893), George Gissing gave a vivid description of this conflict between patriarchy and feminism. He assumed a very vague attitude towards feminism. It can neither be affirmed that he was in favor of feminism nor that he believed in its development, though he worshiped women in several ways.

The purpose of this thesis is to research the vagueness of Gissing's attitude towards feminism.

The Odd Women 出版当時の時代背景

— ヴィクトリア朝における女性観と
フェミニスト運動 —

George Gissing, *The Odd Women* が出版されたのは 1893 年で、この小説の舞台は 1870 年代、80 年代のイギリスである。中心となるストーリーは、2 組の男女の結婚の悲劇と恋の破綻である。

落馬事故で死亡したマドン医士 (Dr. Madden) の末娘モニカ (Monica) は、悲惨な家庭環境から逃れて経済的安定を得るためにエドモンド・ウィドウソン (Edmund Widdowson) と結婚するが、彼に抑圧された生活に耐え切れなくなった彼女は、不倫の恋にも破れ、病気になって、女兒を生んで死亡する。一方、結婚を嫌悪するフェミニスト運動の闘士で、メアリー・バーフット (Mary Barfoot) とともに女性の職業教育に努めているローダ・ナン (Rhoda Nunn) は、メアリーのいとこエヴァラード (Everard) と恋に陥り、一時は結婚まで決意するが、彼とモニカの仲に関する誤解がもとで別れ、永遠に結婚をあきらめ、

再びフェミニスト運動へと戻ってゆく。

これが作品のだいたいのあらすじであるが、ヴィクトリア朝における支配的女性観は、吉田健一氏が端的に述べている通り、「女性は弱いもので、何をするにも他人の助けを借りるのが本当だと決められて」おり、「女の行動を今日のわれわれには想像できないくらい束縛して」⁽¹⁾いた。作品中のマドン家の例が示すように、特に中流家庭では、男は仕事、女は家庭という通念が相当根深く、「男性中心の職業が男を家庭から引き離すようになり始めると、家庭は女性専用の領域に変わって行った。その結果としてヴィクトリア時代には、だんだんひどくなり出した苛酷な商業文明における道徳的価値の堡壘^{ほうるい}として、家庭がいやが上にも感傷化され、理想化されるようになった。夫婦の分離はやがて、この時代を特徴づけた男女の役割の分極化を促し、また同時に性別の紋切型化^{ステレオタイプ}(男性はたくましく能動的であり、女性は弱くて受動的である、といったような)の一因ともなった。」⁽²⁾と J.P. ブラウン (Julia Prewitt Brown) は指摘する。中流階級における、「男は仕事、女は家庭」という

支配的通念は、パトリシア スタップス (Patricia Stubbs) による次の説明のうちでも明らかである。

家庭生活と生産の分離、その結果、男は外の世界で仕事、女は内の世界で思いやりと結びつけて考えられようになったが、このことは、いかなる形の労働からも中流階級の女性を完全に排除することによって、ヴィクトリア時代には度を増し、そして誇張された。これは重要な事柄であったが、これは、ただ単に、女性を家庭に閉じ込め、彼女たちの純潔を守ることを生じただけではなかった。それは、主に、家庭とか家族を理想のものとして守るために生じたのである⁽³⁾。

The Odd Women のうちでは、娘たちを家庭の外に出そうとしないマドン医士、モニカを自分の意のままにしようとするエドモンド・ウィドウソン、ローダ・ナンを服従させようとするエヴァラード・パーフットの3人が、この支配的通念の典型的持ち主といえよう。このような男性支配社会、— 家族内において父が権力を持ち、社会・政治において男性が権力をもつ制度 — を“patriarchy”といい、「父権制」と訳されている。

しかし、この父権制に対してヴィクトリア朝の女性たちは黙ってはおれなかった。フランス革命によって促進された急進的かつ博愛的イデオロギーに部分的に源を発する⁽⁴⁾といわれているイギリスのフェミニスト運動が、組織的な形で行われるようになったのは1850年以降であった⁽⁵⁾。ローダ・ナン、メアリー・パーフットのふたりがこのフェミニストで、前者は急進的、後者は穏健的フェミニストである。

当時、中流階級の女性たちは、たとえつけたにしても、家政婦 (governess) 以外の職業にすることができなかつた。マドン家の長女アリス (Alice)、次女ヴァージニア (Virginia) も最初家政婦だった。そのような女性たちのために、他の職業への道を開く女性雇用推進協会 (Society for Promoting the Employment of Women) が、1859

年7月7日に公式に発足し、1870年から郵便局で女性職員が採用されるようになった。ローダとメアリーは女性の職業教育に努めており、モニカをタイピストとして雇う。

この作品とは直接の関係はないが、その他いくつかの代表的フェミニスト運動を挙げよう。既婚女性の権利を守る法律として、まず婚姻訴訟法 (Matrimonial Causes Act) が、1857年国会を通過し、それに伴って離婚裁判所が設立された。その後、幾多の苦労を経て、既婚女性財産法 (Married Women's Property Act) が、1882年、完全な形で成立し、既婚女性は自らの財産の独立した所有権を有することが可能となった。モニカがウィドウソンと結婚したのは1888年21歳の時であったが、当時ほとんど無一文であった彼女には、この法律は無縁だったろう。

女性の教育に関する改革として、まず1848年にクィーンズ・カレッジ (Queen's College) が設立され、家政婦をも含めた中流階級の女子に、全般的な中等教育を提供した。これを機に、1849年にはベッドフォード・カレッジ (Bedford College) が、1850年には北部ロンドン・コレジエート・スクール (North London Collegiate School) が、1858年にはチェルトナム・レディーズ・カレッジ (Cheltenham Ladies' College) が相次いで設立された。女子パブリック・スクールに関しても、1840年から70年の間に10校が、1871年から80年の間に36校が、さらに1881年と90年の間には34校が誕生した。そして1870年には女性が大学に入学を許可されるようになった。

その他としては、伝染病条例 (Contagious Diseases Acts) の撤廃を目指して、ジョゼフィーヌ・バトラー夫人 (Mrs. Josephine Butler) が1869年から始めた運動、1860年代から始まった婦人参政権を求める運動などが代表的なフェミニスト運動として挙げられるだろう。

ローダとメアリーのように、これらの平等と自由を旨として戦っている女性たち、あるいはそれらを勝ち得た女性たちを指して“new women”ということばが生まれたのが1890年代だった。このように数多くのフェミニスト運動が行われた19世紀後半は、フェミニズムと既

存の父権制が激しく衝突した時代であり、Gissingが *The Odd Women* を発表した1892年前後には、女性問題を扱った数多くの小説が登場した。Gissingの一連の作品を初めとして、George Meredithの *Diana of the Crossways* (1885)、*One of Our Conquerors* (1891)、George Mooreの *A Mummer's Wife* (1885)、*Esther Waters* (1894)、Thomas Hardyの *Tess of the D'Urbervilles* (1891)、*Jude the Obscure* (1895)、さらにはOlive Schreinerの *Dreams* (1891)、Sarah Grandの *The Heavenly Twins* (1893)、George Egertonの *Discords* (1895) といった“new women” novelistsといわれる女流作家の諸作品などがそうである。

The Odd Women の曖昧性 — Gissing のフェミニズムに対する 姿勢 —

これら、19世紀末に登場した、女性問題を扱った数多くの小説のうちでも、特に *The Odd Women* はヴィクトリア朝における女性観、父権制、フェミニズム、そして父権制とフェミニズムの衝突といった時代の特徴を典型的に描き出した作品である。ディルドレ・ディヴィド (Deirdre David) は、「*The Odd Women* は、社会変化の価値に関する複雑で曖昧な小説である。」⁽⁶⁾と述べている。モニカは女兒を生んで死亡する。その女兒を抱いたローダが、「かわいそうな子だわ。」とつぶやくのがこの作品の結末であり、このような小説の終わり方が、著者ギッシングのフェミニズムに対する曖昧な姿勢を端的に表現しているといえよう。彼は、ローダ・ナンというフェミニスト運動の闘士を描き出したが、決してその勝利を描き出してはいない。父権制とフェミニズムの衝突の描写を通して、フェミニズムの未来はどうか分らないというギッシングの曖昧な姿勢をこの作品から読み取ることはできても、彼がフェミニズムを支持していたか、いなかったかを捜り出すことはできない。

The Odd Women というタイトルは、モニカ

との会話におけるローダの発言のうちに由来する。彼女はモニカに、イギリスには男性よりも女性の方が50万人多いという事実を教え、次のように述べる。

それくらいだと言われてますわ。そんなに多く余分な女性たちがいるのですよ — 結婚不可能な。悲観論者たちは、彼女たちのことを、役立たずの、無駄な、くだらない生き物だと言っていますわ。私自身、そのうちのひとりですが、当然違った見方をしています。私は彼女たちを偉大な予備軍とみなしています。ひとりの女性が結婚へと消え失せた時、その予備軍が交代のひとりを世直しの仕事のために提供するのです。実際には、まだ彼女たちみんなが訓練されているわけではありません — まだそれから程遠いですわ。私は彼女たちを手助けしたいのです — その予備軍を訓練したいのです⁽⁷⁾。

彼女はまたエヴァラードとの会話においても、「私の仕事と関心は結婚しない女性たちに向けられています — 彼女たちを私は the 'odd women' と呼んでいます。」(P.145) と述べ、彼女の決意を明らかにする。つまり、このタイトルの第一義的な意味は、結婚しない、あるいはできない余分な女性たちということだ。

19世紀後半のイギリスにおける女性人口の過剰がいかに大きな社会問題であったかは、パンクス夫妻の示す次の統計からも明らかである。

グレート・ブリテンには1851年に、15歳以上の独身女性が2,765,000人いた。この数字は、1861年までに2,956,000人に上り、さらに1871年には3,228,700人に上った。つまり20年間で16.8パーセントの増加である。なるほどこの増加は、全人口の増加率あるいは15歳以上の年齢群の増加率より小さかったが、この独身女性増加の数字には、72,500人から125,200人への過剰の独身女性数の増加、すなわち20年間に72.7パーセント増が

内包されていたので、それはヴィクトリア時代人を悩ませた絶対的な数値であった⁽⁸⁾。

この第一義的な意味での“the odd women”は、自らも公言している通りローダ・ナンと、そして彼女のフェミニスト運動の仲間メアリー・バーフット、さらには悲惨な家庭環境ゆえに結婚をあきらめているモニカの姉たち、アリスとヴァージニアである。

そして、“odd”という単語にはもうひとつ「異常な、風変わりな」という意味もあるが、ギッシングはこの意味をもタイトルのうちに含めているようである。この意味で挙げられるのは、上述の4人を含めて、悲劇的結婚から死に至るモニカ・マドン、愛している男からは見向きもされなくて、彼とモニカとの仲を疑って、モニカにつきまとうミス・イード (Miss Eade)、エドマンドの義理の姉で、モニカを快く思わないルーク・ウィドウソン (Luke Widdowson)、既婚男性と恋に陥り、捨てられて娼婦に身を落とし、あげくの果ては自殺するベラ・ロイストン (Bella Royston) らであろう。

ディルドレ・ディヴィッドは「*The Odd Women* は父権制の没落とフェミニズムの勝利についてなどではなく、精巧な構造を持った支配的文化の中での、それを破壊しようとする文化の格闘についてである。」⁽⁹⁾、つまり父権制社会の中で、それを破壊しようとするフェミニズムの格闘についてである、と述べる。そしてこのフェミニズムの格闘は、「それが変えようと努めているものが持つ信念と慣習の影響を必然的に受けなければならなかった。」⁽¹⁰⁾と述べる。これらをさらに言い換えるならば、この作品は、ローダ・ナンとメアリー・バーフットというふたりのフェミニストの父権制社会を変えようとする戦いについてであるが、彼女たちはまたその旧来の父権制社会の信念と慣習に影響されなければならなかったということだ。続けてディルドレ・ディヴィッドは、この作品は、「ヴィクトリア朝父権制の、その犠牲者たちに対してばかりか、その主導者たちに対しての有害な影響をも徹底的に主張している。」⁽¹¹⁾と付け加える。ここで言う

「犠牲者たち」とは、モニカ、アリス、ヴァージニア、「主導者たち」とは、前にも述べたが、マドン医士、エドマンド・ウィドウソン、エヴァラード・バーフットである。

本論文では、モニカ・マドンとエドマンド・ウィドウソンの悲劇的結婚、そしてローダ・ナンとエヴァラード・バーフットの恋の破綻の課程をたどりながら、(1)ヴィクトリア朝の父権制ならびにフェミニズムがどのように表現されているか、(2)その衝突のありさま、(3)フェミニストたちが父権制から受けた影響、(4)父権制主導者たちが父権制それ自身に害されている様子、(5)ギッシングの、フェミニズムに対する曖昧な姿勢、といったものを明らかにしてゆきたい。

モニカ・マドンとエドマンド・ウィドウソン

モニカの父、マドン医士の父権制信奉は、作品の冒頭部分で次のように表現されている。

世俗のことは男たちに取り組ませておけばいい。というのは、昔の賛美歌に歌われている通り、「それが男たちの本性」だからね。私の娘たちが金銭の事で悩まなければならないなどと思うとしたら、実に悲しいことだ。

(p. 1)

「女性たちは、老いも若きも、決してお金のことを考えるべきではない。」(p. 2)と主張する彼だが、その妻は、6人の娘を生んだ後、2年前の1870年に亡くなっていた。そして皮肉なことにも、生命保険加入を翌日に控えた彼は、急病患者を診察に行き、その帰途で落馬事故に合い死亡するのだった。「最後の最後まで家庭はさみしい心配事から守られなければならない。」と理想を述べ、「男も女も、さみしい心配事に悩まされなくなる日が来るだろう。」(p. 2)と楽観視し、金銭のことはあまり考慮せず、生命保険加入を延ばしに延ばして皮肉な死を遂げたマドン医士は、家庭を理想像とみなす、中流階級の典型的父権制意識の哀れな犠牲者といえよう。

彼の父権制信奉の犠牲者となったのは彼自身

ばかりでなく、彼の3人の娘、アリス、ヴァージニア、モニカもそうだった。他の3人の娘たちは、それぞれ肺病、遊覧船転覆事故、精神病による溺死で亡くなっており、そしてこの3人娘に残されたのはわずかな父親の遺産だけだった。かくして、マドン医士の生前の望みとは裏腹に、アリスは幼児家政婦として、ヴァージニアは老婦人の付添いとして、モニカは服地店の年季奉公として、最低限の賃金で生計を立てることを余儀なくさせられる。

坐りがちの生活の結果、肥満気味で、肩は丸く、足は短く、頬はたるんでふくらみ、風邪がちで顔色は悪く、顔じゅう吹出物だらけの長女アリス、不健康な顔色で、ふけ込みが早くて口びるはますますたるんでしまい、目はくぼみ、しわだらけで、やせこけた次女ヴァージニアはすでに結婚をあきらめ、“the odd women”の道を歩むことを決意していた。それに比べ、明らかに末娘モニカは美貌において彼女たちに勝っており、ふたりはモニカの結婚に期待を寄せるのだった。そして、モニカ自身の期待と自信も次のように描かれている。

私自身の未来は、お姉さんたちが期待していた未来よりもっと希望に満ちている。私自身、美人だということも知っている。私が通りを歩いていると、私をつけてきて、知り合いになろうと試みた男の人たちがいた。一緒に住んでいる女の子たちのうち何人かは私を妬ましげに、意地悪く眺めている。(p.31)

そんな時に、彼女の前に現れたのがエドモンド・ウィドウソンだった。彼は、父の死後、14歳から働き始めたが、土地で金を儲けた弟が死に、その財産を受け継ぐことにより働かなくても食べてゆける自由の身分となり、44歳の誕生日を迎えていた。モニカと知り合ってから、彼は彼女にこそこそつきまとうようになった。モニカはそんな彼を嫌いながらもある種の満足感を覚えていた。彼の偏執狂ぶりは次の通りだ。

「私はあなたにお会いできないと、生きて

ゆかれないのです。」彼はとうとう言った。「あなたが私に会うことを拒否なさるのでしたら、私は、ただ、あなたがおられる場所のまわりをさまよいて歩く以外ありません。どうか、どうか、私があなたのスパイをしているなどとお思いにならないでください。実際、あなたが歩いている時のお顔、お姿を拝見するためだけなのです。あなたにお会いできなかった時には、私は惨めな気持ちで引き返します。あなたのことは決して私の心から離れません——決して。」(pp.71-72)

このようなカリカチュア的人物として登場してくるウィドウソンのうちに、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) が描いたカリカチュア的人物たちを感じる。ここには、その人物論を書くほど⁽¹²⁾、ギッシングが崇拜してやまなかったディケンズの影響がみられるのかもしれない。ウィドウソンのカリカチュア性は、モニカに対する結婚申し込みのうちにも見られる。

私は、今晚、心に残る希望のことばをいただかないとあなたとお別れすることができません。あなたに私の妻になっていただきたいと私が思っていることをあなたは御存じでしょう。あなたに承諾していただくために、私が何か言えることとかできることがあればおっしゃっていただけないでしょうか。あなたは私のことを少しでも疑っていらっしゃるのですか。(p.74)

分別ある賢い女性であれば、彼の性格を見抜いて、きっぱり断るであろうプロポーズのことばに、貧しく教養のないモニカは、ちゅうちょしながらも、心をくすぐられ、週に1度彼と会うことを約束する。相変わらずラブレターを送り続けるウィドウソンに対して、モニカはとうとう結婚を承諾する。彼女はその理由を女友たちのミリィ・ベスパー (Milly Vesper) に次のように述べる。

彼は私をととても愛しているから、私を彼と結婚しなくちゃいけないって気持ちにさせたのよ。それに、私もそのことが嬉しいわ。ミリィ、私はあなたと違うの。私は今の生活に満足できないわ。パーフットさんも、ナンさんも、とても頭がよくていい人たちだわ。だから私、あの人たちを尊敬しているの。でも私にはあの人たちの生き方はできないわ。独身で生涯を通すなんて、私にはとても、とても恐ろしいことだわ。……(中略)……アリス姉さんとヴァージニア姉さんのことを考えるたびに、私、恐ろしくなるの。あの年齢であんな生活送るくらいだったら死んだ方がましよ。ええ、ずっとましよ。姉さんたちがどんなに惨めか、あなた想像できないでしょ、実際。それに、私、姉さんたちと同じ性質なもの、分るでしょ。あなたやヘイブンさん(Miss Haven)と比べたら、私、とても弱くって子供っぽいわ。(p.111)

この発言からも分かる通り、モニカはウィドウソンを愛してはいない。彼を愛そうと無理やり自分を強いているだけで、実際には、現在の悲惨な境遇から逃がれて、楽な暮らしを求めてウィドウソンとの結婚を決意したのである。居心地のよい家庭を求めて結婚するようなことだと、将来ひどく後悔するようになるだろうと言うミリィの警告に逆らって、モニカは結婚に踏み切るのだった。

モニカの望み通りの生活を送らせてくれるとウィドウソンは保証してくれたはずだったが、実際の結婚生活においては、彼女の期待を裏切ることが次々に起こる。彼女が他の男性と握手を交わしただけで、ウィドウソンは嫉妬の感情をあらわにし、彼女が夜ひとりで女友だちのミリィに会いに行くのでさえ嫌がった。彼らの日曜日は、1時昼食、6時お茶という習慣で、ウィドウソンは、この日課が少しでも狂うことが嫌だった。さらに、モニカは、彼の好みに合った服装をすることを強いられ、平常は、朝のうち家事、午後は彼と一緒に散歩かドライブ、夜は読書という日課を強いられた。ウィドウソン

は、モニカが、どんな目的であれ、ひとりで出歩くことに反対し、そして彼女が新しい知人を作ることに嫉妬した。要するに、ウィドウソンは、そのカリカチュア的性格を十二分に発揮して、モニカを溺愛するのである。彼は、彼の女性観を、モニカに向かって次のように述べる。

女性の本領は家庭なんだよ、モニカ。不幸にも、外に出て生計を立てざるを得ない娘たちが多いけれども、これは不自然なことで、文明が進化すれば、完全に失くなる必要性なんだよ。君はジョン・ラスキン(John Ruskin)を読んでいればいい。彼が女性について述べているあらゆることばは、的を得た貴重なものだよ。もし女性が、自分の家庭を持てなかったり、他人の家庭で仕事を見つけれなかったとしたら、その女性は実に哀れだ。彼女の生涯は、不幸を運命づけられているだろう。教育のある女性は、男性の生活をまねしたりしようとしなくて、家庭の奉仕者たるべきだと私は心から信じているよ。(pp.152-153)

ここに表現されているのは、マドン医士と同じ父権制信奉である。しかし、マドン医士が父権制観念を表明していたのはモニカが5歳の時であるのに対し、ウィドウソンのこの表明は彼女が21歳の時。成人した彼女には耐えられるものではなかった。彼女は、ストレスのあまり病気になる、転地療養に出かける。そこで彼女はウィドウソンに自由を主張する。

私はもっとたくさん友だちを作って、その人たちとひんぱんに会いたいわ。私は、人の話を聞きたいの。そして私のまわりで何が起きているのか知りたいの。それに違う種類の本も読みたいわ。本当に面白くって、後で楽しく思い出すことができるものを私に与えてくれるような本をね。もっと自由がなければ、私にとって人生はまもなく重荷になってしまうわ。(p.163)

しかし、父権制観念が浸透しているウィドウ

ソンはあくまで主張を曲げず、彼女が女友だちであるコスグローブ夫人 (Mrs. Cosgrove) の家を訪れることさえ禁じるのだった。そして、彼女がどうしても行くといい張ると、彼は彼女の前にひれ伏して泣き出すという有様だった。結局は、ふたりで出かけるということに落ち着き、この家でモニカが出会ったのがベビス (Bevis) という男だった。かつては音楽家を目指したが、家庭環境ゆえに断念して、現在ではワイン商人をやりながら一家を支えているという彼の歌声にモニカは聞き惚れ、これが彼女の人生の悲劇を招くもうひとつの糸口ともなる。

療養先から戻って、モニカがエヴァラード・バーフットとアート・ギャラリーで2度にわたって談笑しているのを目撃したウィドウソンは、嫉妬のあまり、ふたりだけの生活を守りたいがゆえに、モニカの一家がかつて住んでいたクリーブドン (Clevedon) へ引越すことを提案する。モニカは当然のごとく反対し、夫婦の亀裂は深まっていった。

そのような家庭不和の中で、再びコスグローブ家を訪れたモニカにとって、「もっとも感じがいい男性で、とても親切で、陽気で、活発で、また非常に才能もある」(p.170)と彼女の目に映ったベビスとの会話は、時がたつのも忘れるほど楽しく、したがってふたりが不倫の恋仲に陥るのにもさほど時間はかからなかった。モニカは、夫にウソをついて、ベビスのもとへ通うようになり、仕事のためイギリスを去ってフランスへ行く彼に、自分も連れて行って欲しいと懇願するのだった。夫に対する嫌悪感が極限に達しているモニカは次のように口走る。

「私をあなたといっしょに連れて行って！」とモニカはそれから両手を合わせて叫んだ。

「私、夫といっしょには住めないわ。あなたといっしょに私もフランスに行かせて。」(p.227)

夫ウィドウソンに対するモニカの嫌悪は、ベビスとの会話において、さらに次のように表現されている。

「勇気があるのかい——君にそんなことする勇気があるのかい。」ベビスは口ごもりながら言った。

「勇気があるか、ですって。いったいどんな勇気が必要なの。どうして私に嫌な男と暮らし続ける勇気があるまいしょうに。」

「君はあいつと別れなくちゃならない。当然、別れなくちゃならない。」

「ええ、後1日もたたないうちにだわ。」モニカはすすり泣きながら言った。「今日、帰ることだってまちがっているわ。私はあなたを愛しているわ。そして、そのことで恥ずかしいことなど何ひとつないわ。でも、偽善者ぶって夫といっしょに暮らすなんてどれほどひどく恥ずかしいことでしょう。あの人のおかげで、あの人と同じくらい自分が嫌になってくるわ。」(p.229)

しかし、この後モニカを待ち受けていたのはベビスに対する失望だった。いざ駆け落ち実行の段階になると、ベビスは、彼がフランスに落ち着いてから来て欲しいとモニカに言う。彼がいっしょに連れて行ってくれるものとばかり思っていたモニカには、そう言う時の彼の口調の女々しさはひどい幻滅であった。そして、養うべき母と妹たちがいるベビスにとっては、自分のことが重荷なのではとモニカは勘繰るのだった。彼を見送った後、彼女は、夫のもとへ戻るべきか、姉ヴァージニアの下宿へ行って、夫へ離婚状を出すべきかで激しく葛藤する。突然、彼女は気分が悪くなって気を失い、2、3人の女性に助けられて正気に戻った後、結局は夫のもとへ戻るのだった。彼女の、ベビスに対する気持ちが激しく揺れ動く様は次の通りである。

幾度も彼女は、ベビスは自分にとってどんな存在でもないんだと心に言い聞かせていた。しかし同時に、ベビスの振る舞いは正しく賢明だったと自分に言い聞かせたい、言い聞かせようという衝動にかられて彼のことを思うのだった。幾度も彼女は、昨日考えていたことを実行しようと、つまり、夫のもとを

去って、そして夫が自分を呼び戻そうとするあらゆる努力に抵抗しようと決意するのだった。しかし再び、大多数の妻たちがやむを得ず受け入れてきた墮落を受け入れて、夫との生活に甘んじるのだった。彼女の心は葛藤していた。そして肉体的にも、健康からは程遠いと彼女は感じていた。(p.245)

あきらめの人生を送るにはまだ若過ぎる彼女は、ベビスとの再会を決意し、彼の住むフラットへ直接出かけて行く。そこで彼女が目撃したのは、階段を降りてくる若い女性だった。モニカは、その女性がベビスの部屋から出て来たのではという疑惑にかられ、彼の部屋をノックするが応答はなかった。彼は、その女性が出て行った後の訪問者を無視しているのでは、でなければ、彼は留守中はその女性に鍵を渡しているのでは、そのような女性がいるからこそ、彼は自分のことを本気で思っていないのでは、とモニカの心には次々と疑惑がわき起こってくるのだった。彼女は再びドアをノックするが、返答はなく、彼女は絶望のあまり泣きくずれのだった。

家に戻って、彼女は夫にミス・バーフットのもとへ行っていたと告げるや否や、ウィドウソンは「うそつき！」とどなりつけ、彼女に飛びついて、今にも殺しそうな暴力をふるう。ウィドウソンは、モニカがエヴァラードと一緒にアート・ギャラリーにいるのを目撃して以来、彼女の行動に不信をいだき、私立探偵を雇って彼女をスパイしており、彼女の度重なるウソを見抜いていた。

モニカは夫からかろうじて逃げ出し、姉の所へ身を寄せる。そして、フランスにいるベビスからラブ・レターを受け取るが、もはや彼女はなんの感情も覚えなかった。彼の優しいことばも、赤の他人に向かって述べられているようで、愛のことばも彼女にはまったく意味がなかった。ベビスに対する彼女のさめた感情は次のように表現されている。

ベビスのイメージは絵姿のように、つまり

単に、人間の見せかけにしか過ぎないかのように、すでに遠い過去の中へと遠ざかっていた。そして、彼の手紙は、彼に対するそんな感情に一致していた。あたかも、どこかの退屈な小説からの引用であるかのように、それは人工的で気の抜けた手紙だった。(p.295)

ベビスに対する愛の感情も失せた彼女は、悲劇の人生に向かって、一直線につき進むこととなる。ウィドウソンは、モニカが身を寄せている姉の家のまわりをうろつき、自分のもとに戻って来て欲しいという手紙を出すのだが、彼女はそれを焼き捨ててしまう。そのうち、死の恐怖が彼女に取り付き、夜ごと彼女を苦しめるようになった。そして彼女はウィドウソンの子供を宿していることに気づくが、たとえ生まれてきても愛することはないだろうから、もう死にたいとロード・ナンに告げる。

一方、ウィドウソンの方も、とうとうモニカに対する愛をあきらめ、そのことを、彼が移り住んだ下宿の女主人に告げる。

「妻に対しては愛のひとつかけらも残っていないよ。」彼は絶望的な口調で続けた。「あの恐ろしい日々の中に、すべて消え失せてしまった。私はまだ妻を愛しているのだと懸命に思い込もうと努力した。私は手紙を書き続けた。しかし、何の意味もなかった。ただ、惨めなあまり、私は半分気がいいになったということだけなのさ。(p.330)

父権制観念を押しつけようとしたウィドウソンが、そのしっぺ返しを受け、哀れな犠牲者となった様子がここには描かれている。妻の度重なるウソで、彼女をすっかり信用できなくなった彼は、子供が自分の子であるかどうかということも疑う。妻が重態に陥り、電報を受けた彼は出かけて行くが、彼はアリスに会っただけで、妻に会おうとはしなかった。

モニカは、ベビスとの恋のいきさつを手紙に託してウィドウソンに告げ、その後、2度にわたる手当ての甲斐もむなしく、とうとう息を引

き取ってしまう。

モニカとウィドウソンの悲劇の原因を、デイヴィッド・グリルズ (David Grylls) はうまく指摘している。要約すると次の通りだ。ふたりとも父親が事故でなくなり、ちゃんとした教育を受けることができなかった。代わりに彼らは因襲的観念を身につけ、それに固執してしまう。彼らの観念は、共に因襲的ではあるけれども、お互い相入るものではなく、そして共に因襲的であるがゆえに、容易に議論できる性質のもではなかった。これが衝突を引き起こしたのである⁽¹³⁾。

要するに、彼らは自分の考えが絶対に正しいと信じ込んで、相手の考えを受け入れようとしなかったということだ。ウィドウソンは父権制を極端に信奉していた。それがカリカチュア的、誇張的に描かれているだけに、彼の人物像はいきいきとしている。そしてそれゆえに、自らの父権制信奉により犠牲者となる有様、つまりモニカの反発に会い、自らも彼女に対する愛を失ってしまう描写もより顕著になっているといえよう。一方、モニカは、金銭的苦労のない楽な生活を送りたいという望みに固執していた。楽しい生活ということだけにあこがれる彼女は、ウィドウソンとの生活が楽しくないと分かると、容易に不倫の恋に走る。彼女は、ある意味ではマドン医士の「女は家庭」という父権制観念の影響を受け、楽な生活にあこがれたのだろうが、父権制を信奉するウィドウソンとの結婚によって結果的にはその犠牲者となってしまう。

ローダ・ナンとエヴァラード・バーフット

ローダ・ナンは、病気の母の主治医がマドン医士であったことから、彼の一家と親交を深めていた。フェミニスト運動の闘士としての前兆は、1872年15歳当時の彼女の風彩のうちに見て取れる。背は高く、細身で、目つきは鋭く、体力的にも保証されていて、マドン家の中にもひととき目立つ存在だった。そして、実際の年齢よりも2歳上に見え、大人たちの話し方をまねようと努める彼女は、少女的なものには

もはや興味はなく、唯一の喜びは知的な議論で、教師志望の彼女の1日の大部分は試験勉強に費やされていた。しかし、彼女の活力ぶりを示す、このやや皮肉っぽい誇張的描写は、彼女と父権制信奉者たちとの衝突を早くも予感させる。

マドン医士が事故死を遂げてから16年後の1888年、31歳のローダは志通り教師の職を得ていた。この16年の間に、彼女は母に死なれ、その遺産を使ってプリストル (Bristol) へ行き、速記、簿記、商業通信文を習得し、いくつかの仕事を経た後、現在は、彼女にタイプライティングを教えてくれたメアリー・バーフットの助手として、若い女性たちの職業教育に専念していた。

ローダの性格を端的に示すエピソードがある。メアリーのもとへ、かつての教え子で、妻ある男性と恋に陥り、結局は捨てられて路頭に迷っているベラ・ロイストンという22歳の女性から救いを求められる手紙が届いた。彼女を連れ戻して、もう一度教育しようというメアリーの案にローダはあくまで反対する。

あなたの目的は、世の中に出て何かの役に立つ見込みのある選ばれた娘たちを手助けするということでしょう。このミス・ロイストンは、何の役にも立たない並の人間ですわーいや、彼女は並以下です。あんな人間から何か利益が生まれるとお考えになるほどあなたは盲目ですの。もしあなたが彼女を路頭から救い出したいのであれば、あらゆる手段を尽くしてそうなさって下さい。でも、彼女を、あなたの選ばれた生徒たちの中へ入れるとしたら、あなたの仕事は台無しになるでしょう。あんな性格の娘がこの学校にやって来たということをついたん知らせたら——どうせ知られることになりますよ——あなたの役目はもうおしまいですわ。1年たったら、あなたは学校を完全にあきらめるか、でなければ浮浪者の避難所にするかの選択を迫られることになりますわ。(pp.57-58)

この一節は、フェミニストの闘士としてのロ

ーダ・ナンの過激な性格を示すと同時に、セックスの対象としての女性に対する父権制社会の信念の一端を示している。当時の男性の考え方では、セックスの対象となる女性は、容易に搾取が可能であった下層階級に限られていたとディルドレ・デイヴィドは指摘する。ペラ・ロイストンを人間的に劣るとみなして救済を拒むローダは、明らかにこの考えに影響されていると言えよう。

ローダは結婚に関してもメアリーとは違った態度を示す。メアリーは、ただ養ってもらふことだけが目的で女性たちが結婚するのを防ぎたい、しかし女性の大部分が、結婚しなければさうだ人生を送ることになるだろうと述べ、結婚を是認する。それに対し、ローダは、大部分の女性は結婚するからこそ無駄で悲惨な人生を送ることになるのだと述べ、あくまでも結婚を否定する。彼女は、エヴァラード・バーフットとの会話においても結婚への嫌悪感を表明する。

私は、大部分の結婚は、どんな観点からしても忌むべきものだと言っています。しかし、女性たちがその忌むべきさをきちんと確信して結婚に反抗しなければ、発展はありませんわ。(p.104)

ヴィクトリア朝父権制社会では、中流階級の女性たちは、性的存在ではないという事実によって、道徳的に男性よりもすぐれているとみなされていたともディルドレ・デイヴィドは指摘する⁽¹⁵⁾。ローダが結婚を否定する根拠は、女性の方が道徳的にすぐれており、男性は野卑であるということ、ここにも、彼女が父権制社会の信念に影響されているありさまが描かれている。

しかし、このようなフェミニストの闘士ローダ・ナンに対して、メアリーのいとこであるエヴァラードは魅せられてゆくのだ。最初、ローダに対する彼の関心は純粹に知的なものであり、彼にとって彼女は官能的な魅力は持ち合わせていなかったが、男性と対等に、率直に話

す彼女は魅力的だった。「ぼくたちは、女性と結婚に関しては違った観点から眺めているけれども、ぼくたちの目的は同じですよ。」「ぼくの心の中では、あなたは男性の幸福のために働いています。」「女性の利益は男性の利益でもあります。」「ぼくはあなたの味方です。」(いずれも p.102)といったことを述べ、エヴァラードは決して父権制信奉者ではなく、ローダに理解を示しているのだというふりをする。しかし、彼の次のことばは、彼の心の中に根づいている男性優位観、すなわち父権制信奉の一端を示していると言えよう。

男性は女性を文明発展の未開段階のところへ置き去ってしまいました。それで、女性は粗野なのだと言っています。……(中略)……ぼくの周囲で見かける女性の大部分は非常に程度が低いものですから、ぼくはついつい不適切なことばを使ってしまうのです。あなたを男性の立場に置いてみて下さい。非常に知的で、高い教育を受けた男性は約百万人、ところがそれに相当する知性を備えた女性の数はたぶん2、3千でしょう。(p.102)

エヴァラードはローダに彼の結婚観を述べる。

ぼく自身の結婚に関する理想は、男女双方に完全な自由があるということです。……(中略)……この理想的関係のもとで結婚する人間はたくさんいます。完全な自由というのはインテリ社会の良識によって認められたもので、これが人間の心の中に巣食う悪を大部分撲滅するでしょう。しかし女性が最初に教化されねばなりません。あなたはその点ではまったく正しいですね。(p.104)

ここにもエヴァラードの男性優位観が現われているが、女性に同情を示し、自由結婚を主張する彼に、ローダは除々に魅せられてゆく。結婚を忌み嫌っているはずだった彼女の心の葛藤の描写は実に真に迫っており、この作品の面白

味を引き立てている。たとえば次の通りだ。

もう 30 歳を過ぎたので、私が求婚されることなど決してありえない。それが当然の事だと思った方がいいのかもしれない。だから、私の知的決意を邪魔しようとするあらゆる衝動に戸を立てることができただわ。でも、この衝動は時々、こんなふうに扱われるのを拒むことがある。ミス・バーフットも言っているように、私は年の割にはとても若いし、肉体的にも若いし、心も若いわ。少女の頃、彼女は熱烈な夢を見たことがあった。そして、その本性の炎は、道徳と知性の集合体の下で抑えられてはいたが、まだ消えてはいなかった。(p.147)

彼女はひんぱんにエヴァラードのことを考えるようになり、彼の女癖が悪いという評判ゆえに彼にますます引かれてゆくのだった。1月のある日、エヴァラードはメアリーに夕食に招かれ、彼女が深い霧のため帰宅が遅れ、ローダとふたりだけになった時、彼はローダに愛を告白する。彼女は彼の求愛を拒否するが、彼女は遅かれ早かれ自分に身をゆだねることになるだろうとエヴァラードは確信するのだった。この確信も父権制社会の男性優位観に根ざしたものである。

その後、エヴァラードはマルセイユへ出かけ、4月下旬に帰国し、ローダに求婚する。葛藤を続ける彼女は即答を避けるが、心の中では自分を悔いる。

私は正直じゃないわ、と彼女は自分の口実を恥ずかしく思った。決して私は即答を求められているわけじゃない。チェルシー (Chelsea) を去る前に私はこの時が来るのを予期していたもの。そしてミス・バーフットの家には2度と戻らないという可能性を覚悟していたもの。(p.265)

しかし、実際に決意するには彼女の想像をはるかに上回る努力が必要だった。とりわけ彼女

は、イエスということばを言った後の、フェミニストの闘士としての挫折を恐れた。イエスと言えば、自分はエヴァラードの目には卑小に映るだろう、そして自分自身の目にも恥ずべき人間として映るだろう、と彼女は恐れた。そんな彼女の心を読みながら、エヴァラードは彼女に口づけを要求する。最初、彼女は拒絶するが、彼が予期した通り、最終的には身をゆだねるのだった。

「エヴァラード、あなた、私のことを少しでも愛している。」

「ぼくにキスしておくれ。」

彼女は言われた通りにした。そしてふたりの口と口がしっかりと合わさった時、ふたりは意識を失ったかのようになり、ふたりの心臓はひとつとなって鼓動した。(p.266)

エヴァラードとの結婚を承諾したローダは、自分はこれで“odd women”ではなくなると考える。しかし、もはや完全な女性の独立の模範ではないにしても、彼女は別の任務を感じるのだった。すなわち、結婚における男女平等を訴えようと彼女は考えるのだった。

ローダがエヴァラードに魅せられ始めてから、一時は結婚を決意するまでの過程を長く紹介したのは、いかにこれがこの作品の面白味を引き立てているかを強調するためである。彼女が終始一貫してフェミニストの闘士であるよりも、一時的にでもこのような女らしさ、女としての弱さを見せる方が、より人間的であり、彼女の存在を際立たせていると言えよう。しかし、ふたりの間に破局が訪れるのにそう時間はかからなかった。そのきっかけは、エヴァラードのいとこメアリーがローダに宛てた手紙だった。エヴァラードの日常の素行を良く思っていないメアリーは、あくまでローダに彼との交際を反対していた。メアリーは、エヴァラードとモニカの仲が怪しいと告げていた。彼女は、モニカがエヴァラードの家(実際にはベビスの家)を訪れたが、留守だったので家に帰り、夫ウィドソンにはメアリーのもとへ行っていとウソを

ついた事をその手紙でローダに知らせたのである。ローダはエヴァラードに説明を求めるが、身に覚えのない彼は拒否し、彼女に、「ぼくにそんな口の利き方をするなんて、君はどういうつもりなのか。ぼくの方が尋ねなければならぬくらいだ。」と告げるのだった。こうしてふたりの間に亀裂が起こり、口論は続く。

「それじゃ、その説明を見つけ出すのはぼくの義務なのかい。」

「私の義務であるはずがあつて。」

「ローダ、それは君の義務か、でなければ誰の義務でもないはずだよ。ぼくに説明するつもりなどないからね。」(p.277)

ふたりの間の亀裂は深まる一方で、お互い一步も譲らないままに、ふたりはこの場で別れる。しかし、まだお互い同士未練のある彼らは、仲直りのチャンスをつかむためにメアリーの家で話し合いの席を持つのだが、やはり平行線をたどる。

「君自身のことから先に話してくれよ。ぼくに手紙を書くつもりなどまったくなかったというんだね。ぼくは思うんだが、それは、君はぼくをまったく愛していなかったという意味だね。君自身がぼくを疑っていたけれども、まあ何とでも言っているが、ぼくに対する疑いが晴れた時点で、君はぼくに赦しを乞うべきじゃなかったかい。もしぼくを愛していたのならね。」

「私にも、あなたの愛を疑う理由が同じようにあるわ。もしあなたが私を愛していたのなら、一刻も早く私たちの間の障害を取り除こうとしたはずだよ。」

「ぼくたちの間に障害を置いたのは君の方だよ。」エヴァラードは笑いながら言った。

「いいえ。不運のしわざだよ。でなければ幸運のね。どちらか分からないわ。」(p.325)

エヴァラードの誠意がまったく信じられなくなったローダは、「あなたは、心から誠意を持つ

て私を愛してくれたことは一度もなかったわ。これから先、あなたはどんな女性を愛することもないでしょう。私を愛したくらいに愛することさえもね。」(p.327)とエヴァラードに別れのことばを告げ、再びメアリーと手を合わせてフェミニスト運動に専心することを決意する。

ふたりの衝突は、お互いに妥協点を見出そうとしないフェミニストと父権制信奉者の衝突であり、どちらが勝利を治めることもなく、そして善悪の判断もつけ難い。ここに、ギッシングのフェミニズムに対する曖昧な姿勢が感じられる。そして、この曖昧性を決定的にしているのがこの作品の結末である。それは、死んだモニカが生み落とした女兒を抱いたローダの情景だ。

ローダはじっとこの小さな目鼻立ちを眺めていた。それは、心地よいたた寝で、この上なくやすらかで穏やかだった。黒くぱっちりした目はモニカの日だった。そして、その赤ちゃんが深い眠りについた時、ローダの展望は暗くなった。口びるを震わせてため息をもらし、もう一度彼女はつぶやくのだった。「かわいそうな子だよ。」(p.336)

「ローダの展望は暗くなった。」(Rhoda's vision grew dim) の“vision”は、モニカの赤ちゃんの未来に関する展望であると同時に、フェミニスト運動の未来に関する展望という意味も含んではいないだろうか。そして、「かわいそうな子だよ。」というローダのことばは、母親を失った女兒に対する同情であると同時に、フェミニスト運動の未来に対する不安を暗示したものと解釈できないだろうか。

む す び

1892年2月16日、ギッシングは、この作品の主題について、エドゥアルト・ベルツ(Eduard Bertz)に次のような手紙をあてている。

私が現在考えている作品は、「豚に真珠を与える。」という重大問題を扱ったものです。こ

註

の作品には、生まれつき真の教育を受けることが不可能でありながらも、手仕事その他の下等労働をするほど下品ではないのだと考えるように教え込まれた人物たちが登場してきます。今まで私は、置かれている地位よりも実際には高い資質を備えた人物たちの、その本性の格闘する姿を描いてきました。今回は、置かれている地位よりも実際には低い資質しか備えていない人物たちを描くつもりです。この物語は、現代の主勢力である低俗さの研究ということになるでしょう。女性が主要登場人物になる予定です⁽¹⁶⁾。

このギッシングの意図は、悲劇のヒロイン、モニカ・マドンとその2人の姉アリス、ヴァージニアという形で表現される。彼女たちは、「手仕事や下等労働をするほど下品ではない。」という観念、すなわち「女は家庭」という父権制観念を父親のマドン医士から教え込まれ、その犠牲者となる。そして、マドン医士自身もその哀れな犠牲者となり、またもうひとりの犠牲者がエドモンド・ウイドウソンである。

同時に、今まで考察してきたように、この作品は、父権制観念と、19世紀後半に盛り上がってきたフェミニズムの衝突を描いた作品でもある。この衝突は、モニカ対ウイドウソン、ローダ・ナン対エヴァラード・バーフットという形で描かれている。そして、いずれの人間も勝利を味わうことなく傷つくという事実と、結末におけるモニカの娘を抱きかかえたローダの情景が象徴するように、フェミニズムに対するギッシングの曖昧な姿勢がこの作品からは読み取れるのである。

- (1) 『世界の歴史 14 19世紀ヨーロッパ』(東京:筑摩書房, 1979年)のうちの吉田健一「ヴィクトリア風」p.211.
- (2) J.P.ブラウン, 松村昌家訳『19世紀イギリスの小説と社会情勢』(東京:英宝社, 1987年), p.118.
- (3) Patricia Stubbs, *Women & Fiction: Feminism & the Novel 1880-1920* (London: Methuen, 1981), p.5.
- (4) Deirdre David, "Ideologies of Patriarchy, Feminism, and Fiction in *The Odd Women*", in *Feminist Studies 10, no. 1, Spring 1984* (Feminist Studies, 1984), P.137.
- (5) バンクス夫妻, 河村貞枝訳『ヴィクトリア時代の女性たち — フェミニズムと家族計画 —』(東京:創文社, 1980年), p.40.
- (6) Deirdre David, p.117.
- (7) George Gissing, *The Odd Women* (London: Lawrence and Bullen, 1893. rpt. Now York: Norton, 1977), p.37.
- (8) バンクス夫妻, pp.40-41.
- (9) Deirdre David, p.119.
- (10) Ibid., p.120.
- (11) Ibid., p.124.
- (12) ギッシングは *Charles Dickens: A Critical Study* (1898), *The Immortal Dickens* (1925) というディケンズ論を書いている。
- (13) David Grylls, *The Paradox of Gissing* (London: Allen & Unwin, 1986), p.170.
- (14) Deirdre David, p.128.
- (15) Ibid.
- (16) Arthur C. Young, ed. *The Letters of George Gissing to Eduard Bertz 1887-1903* (New Brunswick: Rutgers Univ., 1961), p.144.